

# マコーリーの初期作品

信

澤

淳

## 一はじめに

『英國史<sup>(1)</sup>』の著者として知られるトマス・バビングトン・マコーリーは、十九世紀イギリスの歴史家である。一八〇〇年に生まれ、一八五九年に死んだマコーリーは、ランケやミニュレと同じ世代に属している。<sup>(2)</sup>フランス革命とナポレオン戦争の影響を受け、産業革命が進行する一方で、第一次選挙法改正をはじめとする改革がおこなわれた時代を生きた歴史家である。また、ホイッジの下院議員としての活動でも有名であり、ホイッジの歴史観を反映したホイッジ史家の代表とも見なされている。レズリー・ステイーヴンによると「ホイッジを定義することとマコーリーを定義することは、ほとんど同じことである」<sup>(3)</sup>ということになる。ステイーヴンのみならず、クローカー<sup>(5)</sup>、バジョット<sup>(6)</sup>、アクトン卿<sup>(7)</sup>、グラッドストン<sup>(8)</sup>、モーリー<sup>(9)</sup>ら同時代の批評家たちによって、マコーリーはホイッジの立場を代表する歴史家であり文学的な歴史家であったとの評価は確定されたのであつた。特にマコーリーの甥であるG・O・トレヴェリアンによる伝記『マコーリー卿の生涯と書簡<sup>(10)</sup>』は、その評価を決定的なものとしたものであり、最近までマコーリーに関する議論の出発点とされていたものであつた。日本語で読むことのできる唯一のマコーリーに関する専著、竹越三々の『マコウレー<sup>(11)</sup>』もまた、トレヴェリアンらの論議を基礎として自由と進歩の闘士としてのマコーリーの姿を理想化するものであつた。

しかし、近年、マコーリーに対する再評価が試みられようとしている。一九七二年にシカゴ大学出版局より『英國歴史文学

の古典』<sup>(12)</sup>叢書の一冊として刊行された『トマス・バビングトン・マコーリー選集』、一九七三年にジョン・クライブが著わしたマコーリーの前半生の伝記『マコーリー、歴史家の形成』<sup>(13)</sup>、そして一九七四年より刊行が開始され一九八一年に完結した決定版の六巻本の書簡集の三点を基礎<sup>(14)</sup>として、新しい角度からの研究が生まれようとしている。マコーリーを、ホイッジ史家・文学的歴史家・ランケ以前の水準の歴史家といった表現で要約することに対し疑問符がつけられるようになっている。

ここでは、マコーリーの日本ではあまり紹介されたことのない初期の作品の内容を整理してゆくことによって、マコーリーの出発点を明らかにしてゆくことを試みることとする。一八二二年のマコーリーの最初の論文から、一八三〇年から一八三一年にかけて執筆された未完の著書までを考察の対象とするのは、議会政治家としての活動が本格化する一八三一年以後についてはホイッジという党派の性格と関連付けた別の考察を必要とするためであり、この時期の作品によつて議論をすすめる中でマコーリーが自らの立場を確立していくと考えることができるためである。

## 二 ウィリアム三世論とミットフォード論

「僕はトーリーであつたけれど、ラディカルになつた。でも決してホイッジになりはしない。」<sup>(15)</sup>この言葉は、マコーリーの生涯での党派の変遷を象徴する言葉として有名である。しかし、マコーリーがこの言葉で否定しているホイッジになつた時点は、明確にはされていない。子供のころから根っからのホイッジであつたとする説、ケンブリッジ在学中にラディカルを経てホイッジとなつたとする説、そして『エディンバラ評論』への寄稿を開始した時にホイッジとなつたとする説など、様々な説が存在する。<sup>(16)</sup>さらに、マコーリーにとっての「ホイッジ」という言葉が意味するものについても、単純に定義することはできないとされている。<sup>(17)</sup>

初期のマコーリーの作品の中に、マコーリーとホイッジという視点から注目されやすい論文がある。一八二二年の論文『国

王ウイリアム三世の生涯と性格についてのエッセイ』である。懸賞論文として書かれたこの論文はマコーリーの事実上の処女作<sup>(24)</sup>である。十七世紀後半の歴史の中でのウイリアム三世の位置をフランス王ルイ十四世やクロムウェルの共和政との比較を通じて、明らかにしようとするこの論文は、マコーリーのホイッグ史観を要約した最初の例の一つとして紹介されている。<sup>(25)</sup>マコーリーにとって、ウイリアム三世はそれまでの政治の悪弊を正し、「人類の自由と幸福」を護ることに努めた英雄なのである。ウイリアム三世の中に歴史を導く自由と進歩という理想を見い出そうとするマコーリーの視点は、確かにホイッグ史観であると言えるのかもしれない。マコーリーの文体や修辞の特徴があらわれているという点からも、注目に値するものであるのかもしれない。やがて書かれることになる『英國史』の中での英雄は確かにウイリアム三世である。<sup>(26)</sup>マコーリーが遺した『英國史』の最後の断章は、ウイリアム三世の死を語るものである。この論文で発見されたウイリアム三世という国王がマコーリーにとっての最大の英雄であることは、否定できない。しかし、マコーリーが歴史について書いた最初の論文で、ウイリアム三世を発見した論文であるという以上の意味を、この論文に与えようすることは、この論文に過大なものを期待していることになるのではないだろうか。あくまでも、二十代の最初に書かれた論文でしかないのであるから。マコーリーの独特な歴史観が最初から形成されていたと考えることは、無理であるように思えてならない。

一八二三年と一八二四年の二年間に、マコーリーは『ナイト季刊誌』に十一編の論文<sup>(27)</sup>を発表している。十一編の内容は、ギリシアやローマを舞台とするもの、ダンテやペトラルカを扱うもの、奴隸制問題に関するもの、そして一八二四年に書かれるであろう叙事詩に関するものなど、変化に富んでいる。戯作と言った方がいいような習作が多く、『エディンバラ評論』<sup>(28)</sup>の論文とは別の多様性を示すものである。歴史家・政治家・批評家・詩人として活躍することになるマコーリーの多芸多才ぶりを、この十一編は集中的に示していると言うことができる。ミルトンとコーリーの対話<sup>(29)</sup>編は、一八二五年の『ミルトン』<sup>(30)</sup>の先駆けとなる作品であるという点から注目され、ダンテとペトラルカは、ブルームから示唆された主題<sup>(31)</sup>をマコーリーが如何に消化したのかを示している。西インド諸島の奴隸制を扱ったものは、父ザカリーの歓心を買うためのものであると考えられる。

しかし、『ナイト季刊誌』に多彩な作品を発表したことは、ザカリーへの弁明を必要とすることになる。

『ナイト季刊誌』の第一号を手にしたザカリーは、「道徳の面での作品全般の傾向はトムとその友達にとつて非常に不面目なものであると思うしかない」<sup>(33)</sup>との感想を述べ、マコーリーに寄稿をやめるように求めている。マコーリーは父からの非難に逐一反論する。原稿を以前に父母の前で読んだ時には、一切非難を受けはしなかつたことを力説する。「僕が我が家に道徳的に好ましくない本を持ちこもうと考えることができたなどと想像できますか。」マコーリーは、道徳的に自らが潔白なことを強調しているのだが、面識のない人々によって書かれたものの中には非難に値するものがあることを認めている。そして、マコーリーは、「福音主義の見方と名付けられている」<sup>(34)</sup>見方をしていて父の感情を害したことを理由に、一時、休筆を余儀なくされることになる。すぐに父を納得させることに成功するのだが、半年のブランクが空くことになる。父の感情を刺激する内容の作品であつたこと自体、興味深いことであるよう思える。

さて、『ナイト季刊誌』にマコーリーが発表した論文の中で、もっとも注目に値するものは、一八二五年十一月号に発表された『ミットフォードのギリシア史について』<sup>(35)</sup>である。ミットフォードの『ギリシア史』<sup>(36)</sup>は、ギボンの勧めで書かれたもので、一七八四年に第一巻が刊行され一八一〇年に完結することになる大作である。マコーリーがこの論文を書いた時点で、既に四つの版が別途に刊行されており、英語では書かれたことのないことがらについて詳述していることもあって、非常に人気を博していたのである。しかし、ホイッグやジャコバンの打倒を狙うミットフォードに言わせると「デモクラシーは專制政治にすぎない」<sup>(37)</sup>ということになるのであり、ギリシア史を語りながらフランス革命を標的としていたのである。

マコーリーは、そのミットフォード論を、『ギリシア史』の世評の高さとミットフォードの奇を好む性格について語ることから、始める。そして、当時の歴史家たちが陥っていた人間性を軽んじ白黒の判断をつけたがる傾向を批判し、ミットフォードがその弊害をのがれていたことを認める。<sup>(38)</sup>対象とする時代の同時代の歴史家たちの証言に従うことによるとミットフォードが努めたことも評価している。しかし、党派心が介入することによって、長所がだいなしになってしまつていてそれをマコーリー

は、力説する。「僭主政や寡頭政の熱烈な讃美者」<sup>(42)</sup>で民主政を徹底して憎悪しているミットフォードは、民主政一辺倒の者と同様に、抽象的な概念に走り政治学の基本原理を忘れている。マコーリーは「人民を幸福にすることを欲し、人民を幸福にする術を知つているのが最良の政府」<sup>(43)</sup>であり、「純然たる民主政」<sup>(44)</sup>だけが人民の幸福を実現できるのであるが、人民が自分達の本当の利益というものを理解してゆけるように知識をひろめ教育してゆくのが最高の政治家であるのだと主張する。<sup>(45)</sup>さらに、ミットフォードの好むスバルタの寡頭政は安定をもたらしたが、自由なアテネのように哲学や芸術を産み出してはいないのであり、スバルタ以上にアテネの方が幸福であったと、マコーリーは断言する。<sup>(46)</sup>マコーリーは、民主政の長所をアテネとスバルタを例として明確にしているのであり、寡頭制を理想化するミットフォードを断固として退けているのである。勿論、マコーリーもミットフォードの指摘する民主政の弊害を認めてはいる。しかし、その弊害の多くは民主政特有のものとは言えないことを指摘することによって、マコーリーはミットフォードの批判が一面的であることを説いているのである。<sup>(47)</sup>そして、マコーリーは、ミットフォードが都合のよい作者を無造作に利用し史料を曲解していることをデモステネスに関する記述を例として指摘しているのである。

さて、マコーリーは、そのミットフォード論の最後の部分を、歴史への新しい展望を語ることにあてている。政治と軍事に歴史家が関心を集中させることによって、政治や軍事と同じだけの価値を持つ領域が無責任な小説家に委ねられてしまつていることを、マコーリーは嘆く。「一般に、人生の底流というものは、表面を波立たせる嵐によってかきみだされることはなく、しつかりと流れゆくものである。大多数の幸福というものは、勝利や敗北とも、革命や復古ともかかわりがなく、法によつて規定することもできず、文書館に記録されることもない原因に普通は頼つてゐるのである。スバルタの密集陣がどのようにレウクトラで敗れたのかということや、アレクサンダー大王が毒殺されたのか病死したのかということを知ることではなく、こうした原因を知ることが本当に重要なのである。これなくしては、歴史は中味のない殻にすぎない。」「非常に有益な発明や発見の進展」を闇に葬つて蛮族の王の名前や年号を覚えることに終始してしまつてゐる歴史では、本末転倒していることにな

るのである。そこで、マコーリーは、視野を広げて風俗を生き生きと語り産業の状態について論じ芸術の進歩に关心を払う歴史家が登場することを切望しているのである。「西洋の力・知恵・自由・栄光のすべて」の由来を明らかにことができる歴史家の出現を。勿論、このような社会史の傾向を持つ歴史という発想は、マコーリーの独創ではない。<sup>(51)</sup>『英國史』の冒頭で語られる目標を、この時、マコーリーが定めたのだというわけでもない。マコーリー自身が歴史を書く時は、まだ訪れはしない。アテネの自由を称讃し、歴史家が党派心を離れて社会史の方向へと向うことによつて、マコーリーは将来進むことになる道の一端を垣間見たにすぎない。

ところで、ウイリアム三世についての論文からミットフォード論までの時期のマコーリーは、ホイッグとしての立場から論文を書いていると言えるのであらうか。ウイリアム三世を英雄としてトーリーのミットフォードを批判する立場にマコーリーはあつた。しかし、それは直接、ホイッグであることを意味してはいない。平民出身のブルームの活躍が目立ちはするものの、あくまでもホイッグは、門閥貴族の党派である。ランズダウン侯<sup>(52)</sup>やホランド卿<sup>(53)</sup>のような門閥貴族の人脈を軸に、トーリーから政権を奪うべく闘争を展開していた党派である。しかも、中産階級を取りこみ強力に改革を推進してゆく党派に脱皮する以前の状態であつた。<sup>(54)</sup>ミットフォード論で「人民を幸福にすることを願う」のが最高の政府であり、そのためには純然たる民主政が最も適切であると断言することをばからぬマコーリーと、門閥貴族を軸にしており改革を主導する立場にたつてはいかかつたホイッグでは、距離がありすぎると言うべきではないだらうか。もとより、ホイッグであれトーリーであれ利益や主張を等しくする人々による一枚岩の政党では、この時点では、なかつた。従つて、マコーリーと意見を同じくする部分が存在して当然である。その一致する部分だけを見て、マコーリーをホイッグと言つてしまふのは、軽率と言うことになるのではないだらうか。ステイーヴンがほとんど同じだと考えた形でのマコーリーもホイッグも、この一八二〇年代前半という時期には、まだ存在していなかつたと言うべきなのではないだらうか。だからこそ、『ブラックウード』<sup>(55)</sup>がマコーリーの獲得を考慮するということをおこりえたということになるのではないだらうか。この時期からマコーリーがホイッグで『ナイト季刊誌』の論

文がホイッジの主張そのものであつたとすれば、トーリー系の『ブラックウード』がマコーリーの獲得を考えること自体が不自然であるのではないだろうか。『エディンバラ評論』への対抗心から『エディンバラ評論』よりも先に有望と思える新人を獲得しようとしたのだとしても、マコーリーがホイッジであるのなら無謀と言うしかないよう思える。

### 三 『エディンバラ評論』の初期論文

マコーリーが『エディンバラ評論』に寄稿を開始した正確な事情といふものは、明らかではない。<sup>(58)</sup> 今日までに明らかになっている事情を整理すると次の様になる。<sup>(59)</sup>

奴隸制廃止問題でザカリーと協力していたブルームは、『エディンバラ評論』の設立者の一人であり、強い影響力を持つ存在となつており、自らの勢力を誇示するためにも、マコーリーを新しい寄稿者とすることに意欲的であった。<sup>(60)</sup> 一方、『エディンバラ評論』の編集長であったジェフリーは、創刊以来の寄稿者たちが「年老い、多忙で、愚か」という状況となつていて、これを危惧し、『エディンバラ評論』の衰運を防ぐために新しい寄稿者となる人物を探していた。また、ブルーム以上にマコーリーに対する影響力を持っていた父ザカリーは、党派とかかわりなく奴隸制廃止を推進しようとする人物と親交を結んでおり、少なくとも奴隸制廃止問題にかかる題材の論文であれば、ホイッジの雑誌であつても寄稿することに反対するとは考えられない。さらに、一八二四年六月二十五日にマコーリーがおこなつた奴隸制廃止問題についての講演は、『エディンバラ評論』の誌上で称讃されており、同じ問題を扱つた論文によつて、マコーリーが寄稿を開始することは、自然な推移として認めることができる。従つて、一八二五年一月号に掲載された『西インド諸島』を、マコーリーが『エディンバラ評論』に寄稿した最初の論文であると確定することができれば、寄稿を開始した事情は無理なく理解することができるということになる。そして、今日では、『西インド諸島』がマコーリーの論文であることは、事実として承認を受けている。<sup>(61)</sup>

右に述べた事情が、現在の時点で判明していることがらであり、『ミルトン』によって一八二五年八月号に流星のように登場したという説は、否定されている。<sup>(38)</sup>

さて、『西インド諸島』によつて、マコーリーの『エディンバラ評論』への寄稿は開始された。一八四四年十月号に掲載された『チャタム伯』で寄稿を絶つまでの期間に、マコーリーが寄稿した論文は、四十編が確認されている。<sup>(39)</sup> このうち、二十四編は一八四三年に刊行されたマコーリー自選の『歴史と批評の論文集』に収録されている。一八五〇年に三編が補われた後、一八六〇年にエリスによつて編集刊行された『未刊作品集』<sup>(40)</sup> に九編が収録されている。以上の合計三十六編が、トレヴェリアン夫人編集の『マコーリー作品集』<sup>(41)</sup> にも収録され、マコーリーの『エディンバラ評論』に発表した論文のすべてであると、長らく思われていた。しかし、マコーリーが寄稿した論文は、他に四編存在することが明らかになつてゐる。『西インド諸島』、『ロンドン大学』<sup>(42)</sup>（一八二六年）、『黒人の社会や産業の上の位置』<sup>(43)</sup>（一八二七年）、そして『現在の政権』<sup>(44)</sup>（一八二七年）の四編なのである。初期の当時の政治や社会の問題についての論争文が重点的に省かれてゐるということになるのであるが、こゝではこの四つの論文の中に見られるマコーリーの初期の立場を明らかにしてゆくこととしたい。

『西インド諸島』は、ジェームズ・ステイーヴンの『英領西インド諸島植民地の奴隸制』<sup>(45)</sup>（一八二四年）に対する書評の形をとつた論文である。『エディンバラ評論』では、マコーリーの『歴史』<sup>(46)</sup>（一八二八年）のように、とりあげた本の内容とは無関係に議論が進行する場合も多い。しかし、この『西インド諸島』は、ステイーヴンの著書の内容を整理紹介することに最大の関心を払つてゐる。丁寧に論旨をたどることによつて、マコーリーは自己の論点を明確にすることに努めている。二十四頁の論文の中で、マコーリーが主張していることを整理すると次の様になる。

まず、マコーリーは、ステイーヴンの著書とともに西インド諸島の奴隸がおかれてゐる状況をまとめた。西インド諸島の法は、奴隸所有者に專制的権力を与えており、奴隸は所有者の財産と考えられている。奴隸を所有者が殺傷しても軽微な処罰ですまされている一方で、奴隸が所有者を傷つけた場合は正当防衛であつても死刑となる。逃亡奴隸も死刑となり、書面での許

可を得ず、農園の外に出た奴隸は厳しく処断される。「奴隸は、法律による保護から排除されているのに、一切の制約に従うことにさせられている。<sup>(79)</sup>」奴隸は異人と有色人種に限られており、西インド諸島では黒人は総て奴隸とみなされており、本國やハイチ・コロンビアなどの市民であつたとしても奴隸市場で売られてしまうのである。

その奴隸の境遇を古代ギリシアやローマの場合とスティーヴンは比較し、教会による宗教教育の力というものに期待をかけている。これに対して、マコーリーは、スティーヴンによる比較は寛大すぎるのであり、奴隸たちの境遇が改善されてこそ「あらゆる場所、あらゆる時代において抑圧を憎み自由を愛することを教えてきた」<sup>(80)</sup>キリスト教は力を持つのだと反論する。

さらに、マコーリーは西インド諸島での状況を容認しようとすると見方への反対意見を述べてゆく。西インド諸島では、世論は白人によるもので、奴隸の意志を反映するものではないので、世論がチエック機能を果たすことはない。自分達の特権を容認しろという白人達は「天使」<sup>(81)</sup>であるとみなせと言うに等しい。イギリスにも様々な悪があり犯罪者もいるのであるから許すべきだという主張には、マコーリーは、イギリスでは裁きは必ずつけられるのだが、西インド諸島には裁きはなく、奴隸所有者は「自由の名の下に抑圧するための無制限の力」<sup>(82)</sup>を求めているのだと、反駁する。そして、西インド諸島に植民地を持つこの利点をマコーリーは否定する。世界中で一番高い西インド諸島の砂糖を買わなければならぬといふのは、富をもたらさず、不合理である。軍事面や政治面でも利点と呼べるものはなく、「植民地帝国は近代ヨーロッパにとって最大の呪である」<sup>(83)</sup>ということになり、弊害のすべてが西インド諸島に集約されているのである。

そして、マコーリーは、現状のままでは、奴隸達がたちあがり流血の革命が起ることになるのだと断言する。<sup>(84)</sup>流血の中で植民地が滅び砂漠となつてゆくことを防ぐために、マコーリーは提案する。イギリスで暮らしている西インド諸島の土地所有者達が目覚め改革をおこなつてゆくことを。革命を必要としないような改革をおこなう以外に、救われる道はないのである。<sup>(85)</sup>

マコーリーは、西インド諸島で奴隸がおかれている状況の悲惨さを列挙することによつて人道主義の立場からの救済を訴えているばかりでなく、革命による流血を避けるために改革をするべく立ち上がり力説することにこの第一論文をあてている

のである。<sup>(86)</sup>

続いて発表された『ミルトン』でミルトンという詩人の政治的立場を支持し内乱時代に対して肯定的な評価を下した後、マコーリーが取り組んだのは、教育の問題である。オックスフォードとケンブリッジという二つの大学に対抗して、新たにロンドンに大学を設立しようとするブルームらの運動を支持するマコーリーは、『ロンドン大学』を寄稿するのである。

ケンブリッジのトリニティ・カレッジの卒業生であるマコーリー自身は、ケンブリッジに対してもオックスフォードに対しても悪感情を持つていたわけではない。「我々のカレッジへの愛着は衰えることなく」「私が生きている限り続くことであろう」と晩年に述べているように、マコーリーは、愛着を持ち続けているのである。しかし、マコーリーは、ケンブリッジやオックスフォードの持つ問題点に対して目を閉ざさはない。

オックスフォードやケンブリッジは、イギリス国教会による宗教教育の場であり、学生達を家族から隔離する場であり、ギリシア・ラテン語を中心とする古典教育の場である。その長所を認めた上で、マコーリーは弊害を指摘し、世俗教育が家族の愛情を身近かに感ずる学生達に対して施される場が必要であることを力説する。そして古典教育によって時間を浪費することなく実際的な知識や学問を習得するための場が必要であることを、マコーリーは、強調するのである。<sup>(87)</sup>そのためには新たな大学を設立しなければならないというのである。さらに、マコーリーは言う。「自由の原理は、政治や貿易と同じように、教育においても、人類の幸福にとって、最も重要なことである」と。<sup>(91)</sup>

マコーリーのこの論文の効果がどれほどのものであったのかは、定かではない。ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジは、この一八二六年に設立され一八二八年十月に開講されることになる。<sup>(88)</sup>また、マコーリーは、教育の普及という問題に、この後、『インド教育についての覚書』（一八三五年二月二日）や一八四七年四月十九日の演説<sup>(94)</sup>をはじめとして、再三再四直面することになるのである。

さて、『エチエンバラ評論』の一八二七年三月号の巻頭を飾ったのは、マコーリーの第四論文『マキアヴェリ』である。そ

の同じ号の六番目に掲載されているのが『黒人の社会や産業の上の位置』である。

下院より西インド諸島の黒人奴隸が置かれている状況の調査を命じられた調査団の報告書に対する批評の形式をとるこの論文は、四十頁に及ぶ長文のものである。西インド諸島での奴隸制を擁護することに傾いてしまった報告書を徹底的に批判し葬り去ることがマコーリーの目的である。

まず、「白人と黒人の間とは本能的で克服できない反感が存在しており、対等の条件で一つの社会を作り出すのを見るということへの一切の希望は、永遠に挫折させられるにちがいない」<sup>(95)</sup>という主張に対して、マコーリーは報告書が言うほど決定なことではないことを、ハイチ・アメリカ・ヨーロッパそれぞれの場合での反証をあげて示している。「自然は結びつくことを促しているのだが、後天的な感情だけが離れ離れにしておこうとしているのである」と述べ、克服することは可能であると断言しているのである。

次に、熱帯の住民は必要に迫られないと働らかない怠惰な人間達であるから、奴隸制という形で労働を強制せざるおえないのだという「労働の哲学」<sup>(97)</sup>にマコーリーは反論を加える。奴隸は、アフリカより劣悪な状況の下に輸送され、劣悪な労働条件の下で労働させられている。熱心に労働することによって快適に暮らせるようになる訳ではないのに、熱心に働く者がいる訳はない。奴隸であることによつて勤勉であることを学べはしない。奴隸であること、農業労働を強要されることは、怠惰を助長する。狩猟生活から農業へと進み、怠惰を離れ勤勉を学ぶには、奴隸制は邪魔物でしかない。自らの喜びのために勤勉であることを学べば進歩は速い筈であるとマコーリーは言うのである。<sup>(98)</sup>

そして、マコーリーは、この論文の後半をハイチの事例の検証にあてている。フランス革命の影響の下に黒人奴隸によって建設された共和国、ハイチがフランスの支配下であったころよりも衰退しているということが、奴隸制を擁護する者たちにとっての絶好の論拠となっていた。砂糖やコーヒーの生産の減少があることをマコーリーは認める。しかし、その原因が怠惰であることを否定する。戦争による施設の破壊や独立によつて成立した軍隊の維持のための重税が原因であると、マコーリーは

言う。ハイチの状況は、奴隸制のための論拠には全くならないことを、マコーリーは逐一論証してゆく。

以上のような手続きによつて、マコーリーは西インド諸島において奴隸制を維持することの論拠として正当とみなしうるものは一切ないのだと断言する。「西インド諸島の労働者の状況が望ましいものであるなら」「遲滞なくイングランドに導入すべきである」<sup>(99)</sup>とも断言している。人種や気候や性向を口実とする奴隸制をマコーリーは完全に否定しているのである。そして、マコーリーが重視しているものは、強制による奴隸制の対極にある自由なのである。

マコーリーが一八二七年に『エディンバラ評論』に寄稿したもう一つの論文であり、再録されることなく終わった論文の最後のものである『現在の政権』は、カニングの連立政権を支持するものである。マコーリーの四十編の『エディンバラ評論』<sup>(100)</sup>の論文の中で唯一、当時の政権を直接擁護するために書かれたものである。

マコーリーは言う。「現在の政権の主張は、自由の主張であり、寛容の主張であり、政治科学の主張であり、賢明で公平であることから多くの思慮深い改革がおこなわれることに期待をかけている人民の主張であり、改革がなされぬ限り、暴力的で荒廃を導く革命の生贊となることが避けがたい貴族の主張であるのだ」と。<sup>(101)</sup>トーリーの政権でありながら、同じトーリーのウエリントンを中心とする反対派と厳しく対立するカニングへの手ばなしと言つてもいい讃辞である。そして、カニングがホイッジと結んだことを理由に非難されたことに対し、マコーリーは反論を加えてゆく。マコーリーによると、抽象的に連立政権を批判することは不合理なことであり、諸党派が連立をはかり妥協することは、当然のことなのである。名誉革命そのものが「後世では想像もつかぬほど激しく互いに攻撃しあつていた諸党派の連携の成果」<sup>(102)</sup>なのであり、名誉革命以来のイギリスの政治の歩みは政治的妥協の歴史なのであり、フランス革命戦争の是否をめぐつて激しく対立した小ピットとフォックスでさえ、連立することを欲していたのであるから、原則において一致を見るのであれば、ホイッジとカニングが連立することは、当然なのである。従つて、連立政権の是否は、原則の一貫を見ているのかどうかで決めねばならないのである。連立政権を批判する論客達が言うように「ホイッジは以前から公言してきたすべての見解を放棄しなければカニングを十分に支援する

ことはできない<sup>(14)</sup>」という状況であるのかどうかなのである。マコーリーは、個々の問題点について、ホイッジの主張がカニンゲと一致するものであることを示してゆく。

まず、「外交と商業政策については、二つの党派は数年来完全に一致をみている」と述べた後、マコーリーは、カトリック解放問題を取り上げる。従前の言動からすれば、ホイッジは、カトリックの解放に反対してきたのであるから、カニンゲに反対して当然である。しかし、カトリックに対し敵意を持つこと自体が偏見の産物でしかなく不当である。情報を与えられず七十年か八十年前の考え方をしている大衆が反感を持つことは当然である。しかし、「カトリックの品行は、現在では、最高の賞賛に値するものである」<sup>(15)</sup>のであり、ホイッジが大衆に迎合してカトリック解放への反対に固執する必要はないのである。

カトリック解放を支持する立場にまわつたことでホイッジが批判されるいわれはないのである。

次に、選挙法改正をめぐる問題をマコーリーは取り上げる。ホイッジが改革を支持し改革を政府の方針とするべきであると、マコーリーは主張する。即座に改革が実現されるとは、マコーリーは考えていない。しかし、改革に反対する者達の政権がカニンゲ政権を打倒して成立した場合を想定し危惧する。「結末は、革命、流血の容赦なき革命である」と断言するのである。イギリスの中産階級は体制の長所を認め愛してはいるものの、短所も認めているのであり「欠点が除去される」ことを切望しているのである。改革への期待が裏切られ「最も穩健で賢明な改革」<sup>(16)</sup>にさえ反対する無知で横暴な政権を目のあたりにしたなら、ピューリタン革命が再来することになるのである。大衆は日々の糧を心配し個々の弊害の除去を望んではいるが「体制全体を攻撃することは決して考えていない」<sup>(17)</sup>。それでも「苦難の季節には革命の機は熟する」のであり、「現在の問題は悪の原因ではなく、解決法なのである」とマコーリーは述べているのである。カニンゲ政権の下でホイッジが改革を推進しようとすることは、革命を避けるためには当然のことなのである。

そして、マコーリーは、一八一五年以降のイギリスの状況を整理し、テュルゴーの改革の挫折から王政復古までのフランスの状況と対比することによって、カニンゲを支持することを訴えて、この論文を結んでいるのである。十年を経ずして革命が

勃発するという事態を避けるには、カニングのような「リベラルな政権」<sup>(13)</sup>に期待するしかないと力説することによって。

ホイッグと連携することによって政権を手にしたカニングに、マコーリーは、革命を阻止するために改革を推進することを期待する。ピューリタン革命とフランス革命による流血を例にして、改革の必要性を力説する。しかしカニングは八月に急死し<sup>(14)</sup>、改革の実現には一八三〇年のホイッグ政権の成立を待たねばならないことになる。マコーリーの改革への期待も、ホイッグ政権の下で実現することになる。ホイッグの門閥貴族もマコーリーも流血の革命の先手を打つことによって体制を維持することに腐心することになるのであるが、それはまた別の問題ということになる。

以上の四つの論文は、その時々の議論のために書かれたものである。『現在の政権』は時事問題に密着しそぎたものであり、『西インド諸島』などの三編はブルームの影響の強さや父ザカリーとの関係が目立ちすぎるものである。マコーリー自身が嫌つた初期の駄作の典型と言えるのかもしれない。しかし、四十編の中の一割、『エдинバラ評論』での最初の三年間の三分の一をしめているこの四編を抜きにして、マコーリーを語ることはできない。同時代の問題に対する关心やホイッグやブルームとの関係は、これらの論文にこそ示されているのであるから。

#### 四 未完の『フランス史』

『エдинバラ評論』への寄稿とケンブリッジ大学のフェローであることによつて生計をたてていたマコーリーに、最初の官職をもたらしたのは、ブルームである。<sup>(15)</sup>『エдинバラ評論』で活躍してはいるものの、ザカリーの事業の不振により経済的には苦境に立つっていたマコーリーを、ブルームは官職につけることによつて救済しようとする。そして、ブルームの尽力の結果、大法官リンドハースト卿は、党派の違いを度外視して<sup>(16)</sup>、一八二八年一月に破産管理委員会委員にマコーリーを任命する。マコーリーは、この任命についてゴドリッジ内閣辞任<sup>(17)</sup>により「内閣が存在しないため、受諾することが政治的な従属を意

味しないという時に任命されるというのは、特に嬉しい」と述べている。<sup>(119)</sup>

しかし、ブルームとマコーリーの関係は、この時期以降、暗転する。ジェームズ・ミルの『政府論』を批判する一八二九年三月に発表された論文を契機として、マコーリーと功利主義者との間で展開した論争<sup>(120)</sup>の華々しさはブルームの嫉妬心をかきたることになる。<sup>(121)</sup>そして、この論争に注目したランズダウン侯がマコーリーを、ポケット選挙区であるカーン選出の下院議員とすることに決定した時、ブルームとの決裂は決定的なものとなる。ランズダウン侯は、ポケット選挙区であるカーンに欠員が生じた一八三〇年二月に、マコーリーに白羽の矢をたてたのであるが、ミルを中心とする功利主義者との論争に感心したという以上の事情は、現在のところ不明である。ランズダウン侯からマコーリーに送られ、さらにマコーリーからウイルバーフオース邸に滞在していた妹達のもとに転送された書簡は、現在では残されていない。その他、ランズダウン侯の意図を伝える証言は、管見の限りでは伝えられていない。ブルームが自らの友のものと信じていた議席をマコーリーに奪われ怒り狂う姿が、マコーリーの書簡によって伝えられているにすぎないのである。<sup>(122)</sup>

そして、ブルームとの決裂は、マコーリーの一つ論文を葬り去ることになる。一八三〇年七月のフランスでおこった革命は、マコーリーをフランスに赴かせると共に、この革命についての論文を書くことをマコーリーに促した。<sup>(123)</sup>だが、七月革命についてのこの論文は完成することなく潰え去る。同じ主題についてブルームが書いていたことによつて、マコーリーの論文は断念させられることになつたのである。<sup>(124)</sup>マコーリーは、断念し、マコーリーによる七月革命論は失われた。しかし、あきらめきれないマコーリーは、一冊の本を書くことにとりかかる。フランス革命から七月革命までの同時代のフランス史を扱つた歴史書である。

フランス革命をめぐる同時代史を書くということは、ミシェルをはじめとするフランスの歴史家のみならず、十九世紀の歴史家たちを魅了した主題である。ランケは『フランス革命戦争の起源』<sup>(125)</sup>を書いたばかりでなく、フランス革命やナポレオン戦争を扱つた講義<sup>(126)</sup>を再三再四おこなつてゐる。ブルクハルトも、バーゼル大学で何度も講義し、その講義録の復元<sup>(127)</sup>もおこなわれ

ている。カーライルの『フランス革命史』<sup>(130)</sup>は、歴史と呼ぶには、あまりに文学的すぎるのであるが、カーライルを一躍有名にした。シーリーが書いた最初の歴史の本もナポレオン戦争をめぐるドイツの歴史である『シュタインの生涯と時代』<sup>(131)</sup>であった。生前、ついに本を書くことなく終わったアクトン卿が遺した講義録も『フランス革命講義』<sup>(132)</sup>であつた。マコーリーもまた革命時代のフランスについて書こうとした一人ということになる。

マコーリーのフランス史についての本は、マコーリーの努力にもかかわらず、未完に終わった。「フランス史と下院と破産委員会で殺されかねない」<sup>(133)</sup>との感想を遺しているのだが、一八三〇年から翌年にかけての多忙さの中で、遂に完成することができなかつたのである。<sup>(134)</sup> G・O・トレヴェリアンが未完のフランス史があると述べたのを最後に、原稿は失われたものと思われるうことになる。トレヴェリアン家に相伝されケンブリッジ大学に寄贈されることになるマコーリー文書<sup>(135)</sup>の中にも、その原稿は存在しなかつた。

しかし、原稿は存在した。ロンドンのロングマン社の倉庫に百年以上にわたつて忘れられたまま保管されていた。そして、その原稿は一九七七年に刊行されることになる。J・ハムバーガーの調査研究の成果である。<sup>(136)</sup>ここでは、一九七七年に刊行されたテキストをもとに内容の整理を試みることとする。

『ブルボン家の王政復古からルイ・フィリップの即位までのフランスの歴史』<sup>(137)</sup>、これがマコーリーが本書に与えた正式な表題である。しかし、この表題は現在遺されている原稿の表題としては適切ではない。ハムバーガーによる『ナポレオンとブルボン家の王政復古』という表題の方が内容に即している。マコーリーはナポレオンを中心として、この現存する原稿を書いているのである。現存する六十三頁<sup>(138)</sup>のテキストは、冒頭の四頁程を除くとナポレオンとその独裁について語るものとなつてゐる。ブルボン家の復位についての記述もナポレオンの影の下で語られているのである。

「近代史には非常に重要で興味深い二つの部分がある。長期議会の開会からステュアート家の二度目の追放までのイングラ  
ンドの歴史と、国民公会のヴエルサイユでの開会からオルLEAN家の即位までのフランスの歴史である。」<sup>(140)</sup>

右の言葉によつて、マコーリーの『フランス史』は始まる。イギリス史の概観の後、フランス革命の経過を整理して、ナポレオン時代を詳述するという構成であつたはずなのであるが、ナポレオン以前について語つた部分は、佚失した部分が非常に多い。<sup>(13)</sup> 残された部分からわかることは、マコーリーがイギリスの革命をイギリス一国の事件と考えていたことであり、宗教問題から内乱が発生することになりはするもののフランス革命のような行き過ぎはなかつたとみなしていることである。<sup>(14)</sup> そして、ジロンド派、ダントン、ロベスピエールが次々と没落した後、フランスが軍事独裁へと導かれてゆくのは当然の推移であるとマコーリーは考へてゐる。

続いて、ナポレオンの政権奪取とその体制の確立過程を、マコーリーは述べてゆく。そして、ナポレオンによつてブルボン家の支配は完全に過去のものとなり、ナポレオンという唯一の独裁者によつて一切が支配される体制が生まれたのだとマコーリーは断言する。<sup>(15)</sup> しかし、「大部分のキリスト教世界の絶対君主の権力よりも強大であつたにもかかわらず、ナポレオンの権力は恐るべき危険にさらされた」<sup>(16)</sup> のだとマコーリーは言う。それがイギリスの存在であるのだとマコーリーは言う。軍事力や経済力の面での対立についてもマコーリーは述べているのだが、何よりもイギリスには自由があるという一点を強調している。フランスに導入された社会的平等も新しい法典もイギリスにはない。しかし、「イングランドには、フランスには全く存在しない、政治的な自由がある。」教育や思想を含めて一切を統制しようとするナポレオンにとって、自由の国としてのイギリスが海峡をはさんで存在することが最大の脅威であり、その脅威との対決をせまられたことがナポレオンの挫折の最大の原因であるというのである。ロシア遠征の失敗の後のナポレオンは、その軍事的天才にもかかわらず、国民をたちあがらせることができず政権を失うことになる。その没落の過程については、マコーリーは事実経過をおうにとどめている。

さて、マコーリーは、フランスの王政復古について語ることに二十五頁<sup>(17)</sup> を費す。ナポレオンの没落までに割かれたのが二十四頁<sup>(18)</sup> であるから、王政復古からナポレオンの再起までの一年弱の記述にマコーリーが注いでいる力のほどがよくわかる。その王政復古の部分をマコーリーは、一六六〇年のイギリスでの王政復古と比較することから始める。イギリスの場合は、王政復

古は國民から歓迎されたのであるが、その理由をマコーリーは「政府の形態はたびたび変化したが、社會の構成や富の分配は實質的に変化していなかつた。國民は、違つた雰囲氣ではあつたが、一六四〇年のころと同じ國民であつた。内政をめぐる意見の相違が始まつたころと同じように、君主制を好み自由も好んでいた」<sup>(148)</sup>という言葉で述べている。さらに、外國の干渉を受ければ王政復古を果たしたことは國民の誇りであつたとも述べている。次に、マコーリーは、フランスの王政復古の性質を整理してゆく。フランスの場合の王政復古は、狀況の產物であり連合軍の干渉によつて達成されたものでしかない。國民感情を含めた一切が、ジャコバン派による破壊の後で、ナポレオンの下で、新しいものへと変化している。<sup>(149)</sup>特權貴族の特權を破壊することが革命の最大の目的であり、國王の復活と共に特權の回復を貴族が画策することが國民の最大の不満の種となつたのである。<sup>(150)</sup>また、マコーリーは、革命以前よりも悲惨な状態を導くことになるので、「革命はそれ自体、惡である」<sup>(151)</sup>とも述べている。しかし、革命が達成され、その成果が既成事實となつた時、「合法性は革命の側に移つた」<sup>(152)</sup>のであるから、ウルトラの主張は別の革命を求めるものでしかないと、マコーリーは断じている。マコーリーに従うと、フランスの王政復古はイギリスの王政復古に及ぶべくもないということになる。

次に、マコーリーは、ルイ十八世とその政治について述べている。ルイ十八世がおかれた状況は、苦境ではあつたものの、アンリ四世ほどひどい状態におかれていたわけではなく、王自身が適性に欠けていたわけでもない。<sup>(153)</sup>即位宣言の中で憲法と自由を保障したのははじめ、ナポレオン法典を存続させ、「革命を認めはしなかつたが、革命の成果を保つた」<sup>(154)</sup>ことにより、國民の大多数を満足させるはずであった。しかし、檢閲制度と土地の所有権をめぐる問題が混乱をひきおこし、國民の間に不満<sup>(155)</sup>が高まつていくるのである。それでも國民の大多数はもう一度革命を起そうと思つてはいなかつたのだとマコーリーは言う。ナポレオンの軍隊での栄光を誇る兵士とナポレオンの下での弾圧から解放され活動を再開した共和派以外に復古王政を打倒しようとするものはなかつたとマコーリーは言う。そして、マコーリーは、手厳しく共和派を批判している。「革命が確立した社會の体制は、根本的に手つかずのままで残つてゐる」<sup>(156)</sup>という事実を見ようとしているのである。「疑問の余地なく、当時の

情勢の下には悪があった。しかし、政治家の人生というものは、いくつかの悪の間での選択にすぎない。問題は、ブルボンか完全な政府かなのではなく、「ブルボンかボナパルトかなのである」ということを見ようとしないのである。ブルボン家と平和が一方にありナポレオンと全面戦争がもう一方にあり、ナポレオンをとれば、戦火の中に革命の一切の成果が失われることを共和派は見ようとしていないと、マコーリーは批判しているのである。そして、国民の大部分は政府に不満ではあったが革命も戦争も望んではおらず、共和派と軍だけがナポレオンの再起を待望していたと、繰り返すことでマコーリーは王政復古について語る部分を終えている。

残された十四頁ほどの部分は、ナポレオンの再起とその敗北、そして王のパリへの帰還について述べた部分である。ナポレオンの再起の前に国王側の陣営は崩壊し、ナポレオンは再び権力を握ぎる。しかし、ナポレオンの栄光を覚えているものの長い圧制を忘れててもいい国民は冷淡であり、ナポレオンによって勢力の均衡が崩れヨーロッパが危機に陥ることを恐れた諸国の連合軍の攻撃によりナポレオンは敗北する。かつてナポレオンと共に戦うことを望んだ諸国民がナポレオンに敵対して同盟を結び、「ニュー・イングランドの市民すら大宴会を開いて暴君の没落を祝う」ことになるのである。マコーリーは、この部分は事実関係を述べることに終始しているように思える。

以上がマコーリーの『フランス史』の内容の概観である。この未完の歴史書の中で、マコーリーはイギリスとフランスについての対比をしばしば試みている。そして、革命そのものの経過であれ、王政復古の性格であれ、マコーリーはイギリスの側に軍配をあげている。前章でとりあげたいくつかの論文と同様に、マコーリーは、革命といふものの否定的な面、悪である面を重視している。ウルトラや共和派の行き過ぎに対して、批判的である。ナポレオンの独裁の下でのフランスの平等よりも、不平等や不公平に満ちているイギリスでの自由に重きを置いている。しかし、マコーリーは、フランス革命やナポレオンが産み出したものを一方的に否定しているわけではない。革命が新しい体制へとひきつがれる成果を産み出したことを認めていいる。革命や独裁の期間の中で確立したもの破壊するためには、別の革命が必要なのであり、それは確立したもの保護すること

よりもはるかに悲惨なことになるのだと力説している。マコーリーは、理論よりも現実を見ることを力説している。現実を見ることを忘れたものたちがフランス史を誤らせたのだと言わんばかりである。そして、最善をめざすことではなく、より少ない悪を選ぶことが政治家の努めであると、語ることによつて、マコーリーはホイッジによる改革に対する姿勢<sup>(161)</sup>を示しているのである。門閥貴族の保身のための策が見え見えであるとしても、抽象的な最善にこだわることによつてより一層の惨状を招くよりはましであるとの発想は、フランス革命と思想家達の理想とのかかわりを述べた一節に確かに見られるものなのである。

理論上の最善を敢て望まず実際の面での弊害を少なくする方法を考えてゆくことが、政治家としてのマコーリーの課題として、やがて登場することになる。ナポレオンや王政復古に對して考察を加えたこの未完のフランス史は、未完であり未刊のままに終わったことにより、史学史の上では影響を持たない孤立した存在でしかない。しかし、マコーリーの歴史や政治に対する見方をたどる上では欠くことのできない存在であると言える。ハムバーガーによる刊本のジャケットに記されているような「史学史的一大事件」ではないにしても、『書簡集』と共にマコーリーを語るにあたつて利用することを怠れば不注意のそしりを受けることになるのであるまい。

## 五 結 び

一八三一年三月一日、ホイッジのグレイ内閣は下院に第一次選挙法改正案を上程する。マコーリーのホイッジの雄弁家としての名声もこの法案の審議と共に誕生する。<sup>(162)</sup> 「私は公生活にホイッジで入つた。ホイッジにとどまり続けることに決めていた<sup>(163)</sup>。」「ホイッジが人類の自由と幸福のためにおこなつてきた一切を誇りをもつて私は見る。」これらの言葉で語られるホイッジとしてのマコーリーの活動はこれより始まる。歴史家としてのマコーリーの活動が本格的に始まるのは、一八三四四年から一八三八年までのインドでの生活を待たなければならぬ。<sup>(164)</sup>

しかし、マコーリーの手に取り上げた初期の作品において、ある程度の方向づけは既になされてゐるようと思える。ウィリアム三世に関する論文では、英雄としてのウィリアム三世が発見されてゐる。ハシドフォードの『カリシア史』についての論文では、歴史家の姿勢と現在の政治や党派との関係に関する関心が注がれてゐる。『西インド諸島』をはじめとする四つの『H.デインバラ評論』の論文では、現在の問題や政治に関する関心がフランス革命の影の下で生きてゐる。流血の革命を避けるには改革や教育が絶対に必要なのだという叫びが聞える。そして、未完の『フランス史』では、イギリス史の進展に対する自信と政治は現実を直視するのみによって導かれるものである確信が歴史叙述の中で結合してゐた。マコーリーが全く変化を体験しなかつたといふ主張は、今日では、伝説でしかない。政治家としても歴史家としても、マコーリーは時に応じて変化していく。『エディンバラ評論』に発表した論文がその時々の状況の産物であることを痛感すればこそ、マコーリーは、四十編の中から二十六編を『論文集』に収録することをめたのであつた。しかし、だからこそ初期の作品の中で語られてゐるものを明らかにしておくにも意味があるものと私には思える。

ところで、私が試みたのは、マコーリーの日本では紹介される機会の少ない初期の作品の内容を整理することにすぎない。しかし、一つの作品を取り組むという基礎の作業を抜きにしては、何も始まりはしないのだと私は確信している。常套句で済まざるを、常にテクストに還るいふを惜れではなるま。

## 註

(一) Thomas Babington Macaulay, *The History of England from the Accession of James II*, 5 vols., London, 1848-61. (以下 *History* と略記。)

(二) ランケは一七九五年、「ショーンは一七九八年の誕生であつ、完全に同じ世代である。近代歴史学の成立にあたり、それぞれに独自の道を模索してゐたのやうなトランケ一人を基準として他を判断するは公平とは言へないと思ふ。

(三) H. A. L. Fisher, "The Whig Historians," *Proceedings of the British Academy*, vol. 14 (1928) におけるイギリス史家によばれた歴史家たちの立派の歴史の整理がある。まだ、Herbert Butterfield, *The Whig Interpretation of History*, London, 1931. (越智

試証史論『ウェーリング史編批判—現代歴史学の反省—』(未来社、一九六七年)は、ホイッグ史家の歴史觀とくらべての議論の出発点である。この「ターナー・マーラー」の著書は、ターナー自身・M・ルーカス・トマスを超越して批判したのであるが、G・M・ルーカス・トマスの最新の研究である David Cannadine, G.M. Trevelyan; A Life in History, London, 1992, pp. 208-12 の論述を参照。

- (4) Leslie Stephen, "Macaulay," in *Hours in a Library*, new ed., vol. II, London, 1892. p. 350. 一九六八年の復刻版より引用。原書文は「ハヤカワ用書『ノーブルズ』編著發表されたのであるが、而田舎女はいふては黙認せぬ」。
- (5) ハーリーの『英國史』は彼の長大な著述 John Wilson Croker, "Mr. Macaulay's History of England," *Quarterly Review*, no. 168. (March 1849) pp. 549-630 を書いた。非常によく長い文章で、著者による歴史書の立場の歴史書として評論されるべきである。
- (6) Walter Bagehot, "Lord Macaulay," the Economist, 31 December 1859, in *The Collected Works of Walter Bagehot*, ed., N. St. John-Steras, vol. I, Harvard, 1965. pp. 429-31.
- (7) Lord Acton, "Review of Frederick Arnold's Public Life of Lord Macaulay," Home and Foreign Review 2 (January 1863), in *Selected Writings of Lord Acton*, ed., J.R. Fears, vol. I, Indianapolis, 1985, pp. 151-5.
- (8) William Ewart Gladstone, "Macaulay," QR, no. 142, (July 1856) pp. 1-50.
- (9) John Morley, "Macaulay," *Forthnightly Review*, n.s. 112, (April 1876), in John Morley, *Nineteenth Century*, ed., P. Stansky, Chicago, 1970, pp. 73-97.
- (10) George Otto Trevelyan, *The Life and Letters of Lord Macaulay*, 2 vols, London, 1876 (スル Life & 著者) にて用ひられた。一九〇九年よりハーリーの著述が再版された。初版は一八七七年の第二版から用ひられる。ただし、この著述は必ずしも歴史操作の問題などではない。後出の著述集の序説を参照。十九世紀のイギリスや書かれた伝記の中での位置について A. O. J. Cockshut, *Truth to Life*, London, 1974. pp. 125-43. 参照。
- (11) 一八九二年に民友社から「新式文豪叢書」の第11巻として刊行。『竹越三文集』(民友社思想文学叢書、第四卷、川一書房、一九八四年)は117~131頁に取録されている。今井宏氏の『明治日本とイギリス革命』(研究社、一九七四年)及び武田清子氏の『日本リチャードの継承』(新波書店、一九八七年)はハーリーに対する理解についての詳しい記述がある。ハーリー一人について専門的な論文を書いたのは、菅見の豈つだせ、川又たかひである。

(22) *Classics of British Historical Literature*, ニードー、ラーヴィー、ハーリーの代表的な歴史家の作品を一人一冊やうに選んだ。アーノーのモード選集の形をとる。ラーヴィーによると著者の抜粋の形をとるが、ハーリーの「古典的」な形態は様々である。」(1) した解説や文献目録が付されており有益。

- (13) Thomas Babington Macaulay, *Selected Writings*, ed., J. Clive and T. Pinney, Chicago, 1972. (エド・SW ジャッカル)
- (14) John Clive, *Macaulay; the Shaping of the Historian*, New York, 1973. (エド・Clive ジャッカル)
- (15) *The Letters of Thomas Babington Macaulay*, ed., T. Pinney, 6 vols, Cambridge, 1974-81. (エド・Letters ジャッカル)
- (16) ネコ・リット・カノンが収蔵せよと/or アーノーの批評が刊行されたが、基本的に資本だ。足利やねだる。二十年以上前から出版のための準備をすこし始めたが、管見の限りでは、未刊のが並んでいたる模様である。
- (17) Peter Gay, *Style in History*, New York, 1974 (新木利春訳『歴史の文体』「ネルヴァ書房」一九七七年) Joseph Hamburger, *Macaulay and the Whig Tradition*, Chicago, 1976. (エド・Hamburger ジャッカル) Margaret Cruikshank, *Thomas Babington Macaulay*, Boston, 1978. J. W. Burrow, *A Liberal Descent*, Cambridge, 1981. などがある。
- (18) John Kenyon, *The History Men*, Pittsburgh, 1983. (イギリス 大久保赳子訳『歴史家たち』「ネルヴァ書房」一九八八年) だがむろ然とした語彙と新しい見方の要素が混在してゐる。The Blackwell Dictionary of Historians, ed., John Cannon, Oxford, 1988. やはり十代半ばの歴史家の母やアーノーが最も多く行数を取ったのが、Ronald Hutton による記述が注目される。なぜなら、
- (19) *Life*, 2nd ed. I 78n. ハーラーがケンブリッジ在学中の Hampden Gurney と語った薬草である。但し、ネンカヒロトの初版 はいの薬草が、11巻の題名として登場してゐる。もとのもとが状況のトドの発揮であるから、不明である。
- (20) Clive, pp. 61-95 で整理が試みられてゐるのを参照。
- (21) Hamburger ジャッカル
- (22) "Essay on the Life and Character of King William III," in A. N. L. Munby, "The Germ of a History; Twenty-Three Quarto Pages of a Macaulay Cambridge Prize Essay," TLS, 1 May 1969, pp. 468-9.
- (23) 一七八五年以来、ネコ・リット・カノンが、アーノーの懸賞論文が募集されたり。
- (24) 一八一九年の詩 *Pompeii* が記述される。アーノーは詩と歴史の文章について外して考えたいとする。
- (25) *Life*, I, pp. 87-90 で最初の紹介が試みられてゐるが、ホーリグモントの見方を強調する形で引用されたり。

- (26) ウィリアムは無条件で英雄的であると評した人物や物語がある。
- (27) *The Works of Lord Macaulay*, ed., Lady Trevelyan, 8 vols. London. 1879. (エドワード・マクダーリーの著書のうちの第四巻末尾の因貢稿の断章である。Works, N. pp. 552-6.
- (28) クライアは存在を指摘する立場があつた。Clive, p. 82.
- (29) “On West Indian Slavery,” *Knight's Quarterly Magazine*, no. 1 (June 1823) を基づいて、*Works*, VII, pp. 559-703. また『西印度の奴隸制』*Everyman's Library* & *Lays of Ancient Rome & Miscellaneous Essays and Poems*, 1910. では、八編が収録された。
- (30) *Edinburgh Review* (エジンバラ・リビューワークス)
- (31) “A Conversation between Mr. Abraham Cowley, and Mr. John Milton, Touching the Great Civil War,” KQM, vol. 2. (August 1824), *Works*, VII pp. 641-59. リビューワークス Clive, pp. 82-83 参照。
- (32) Henry Peter Brougham (1778-1868, DNB) は『ヒュー・ペーパー・オブ・ザ・スコット』の創立者の一人で、チャーチのトランセンドental主義者。創立当初はホーリー・チャーチの機関誌であったが、『ヒュー・ペーパー・オブ・ザ・スコット』へと改名された。この「ペーパー」の名前は、彼の親交を結んでいた。チャーチのホーリー・チャーチの政治家としての活動について、Arthur Aspinall, *Lord Brougham and the Whig Party*, London, 1927. を参照。1811年3月10日の書簡で「ブルーバッジ」マークのマークの書簡を転送された。マークは、心配したことである。
- (33) 1811年6月7日の書簡の記載。Letters, I, p. 187n.
- (34) 1811年6月7日から推定されるチャーチの宛書簡。Letters, I, p. 189.
- (35) 1811年6月110日のナイト宛書簡。Letters, I, p. 189.
- (36) ハリドが立ち入ったこと、マークチャーチの父子関係の実態の問題である。
- (37) “On Mitford's History of Greece,” KQM vol. 3. (November 1824), *Works*, VII, pp. 683-703. リビューワークス 外では現在も見られる。
- (38) William Mitford, *History of Greece*, 5 vols, 1784-1810. 筆者未見、チャーチの歴史の研究の上での「シントチャーチの位置」についてだ。

Arnaldo Momigliano, *Studies in Historiography*, London, 1966. の第三章を参照。

- (39) Warwick Wroth, "William Mitford," DNB.
- (40) G. P. Gooch, *History and Historians in the Nineteenth Century*, London, 1954. p. 289.
- (41) *Works*, VII, p. 687.
- (42) *ibid.*, p. 687.
- (43) *ibid.*, p. 688.
- (44) *ibid.*, p. 688.
- (45) *ibid.*, p. 689.
- (46) *ibid.*, p. 693.
- (47) *ibid.*, pp. 693-6.
- (48) *ibid.*, pp. 696-700.
- (49) *ibid.*, p. 700.
- (50) *ibid.*, p. 701.
- (51) *ibid.*, p. 702.
- (52) ドリーヴの『英國史』による社会史の萌芽としての発想はある。
- (53) *History*, I, p. 1. ジョナサン・エイキンズによれば、ただ筆者の手札にある中村継一氏による訳書『英國民主革命史』上巻（前田出版社、一九四七年）では実現されなかった構想であるため理由に省略された。
- (54) Henry Petty Fitzmaurice, 3rd Marquis of Lansdowne (1780-1863, DNB) 11+12代下院議員となつて以来、ホイッグの指導者として活躍。兄が死つてから父より一八〇九年に爵位を継承し上院議員となる。以後、半世紀にわたり上院でのホイッグの勢力の中へ入るが、稳健派の立場をとる。ブルームとは親しかった。
- (55) グラシドベーの田舎地のイメージドリーヴのホイッグを見ねばは織物。小川晃一氏の『英國自由主義体制の形成』(木鐸社、一九九〇年)、Peter Mandler, *Aristocratic Government in the Age of Reform*, Oxford, 1990. Ian Newbould, *Whiggery and Reform 1830-41*, London, 1990. など「改革の時代」のホイッグについての最近の文献を参照。
- (56) Blackwood's Magazine. 『ハーフインペラル評論』に対するために、ハーフインペラルの出版業者 William Blackwood (1776-1834, DNB) が一八一七年に創刊した雑誌。

(57) 一八二四年の一月『トマシクホール』の寄稿者の一人である William Maginn (1793-1842, DNB) がトマシクホールの「獲得をめぐるトマス・Letters, I, p. 203n. Clive, p. 74.

—の獲得をめぐるトマス・Letters, I, p. 203n. Clive, p. 74.

(58) 編集長 Francis Jeffrey がトマスの書簡が失われたことが、事実と不明確にトマス最大の原因である。

(59) 以下の轉載は Jane Millgate, "Father and Son: Macaulay's Edinburgh Debut," *the Review of English Studies*, N.S., no. 82 (May 1970) によるものが多い。

(60) ティームの役割を力説した論文として Raymond Mortimer, "Mighty Opposites," *Cornhill Magazine*, no. 961 (January 1944) がある。

(61) *Life*, I, p. 116. 但し、この箇葉は一八二四年一月の「トマス・フリードム」の書簡であり、トマス・フリードムが昔からの寄稿者に対する持てた当時の感情を示すものではない。トマス・フリードムの寄稿開始と時期は前後する。

(62) トマス・フリードムの父の書簡は、弁明のためのものとなる傾向が強く。トマス・フリードムが父の期待に応じ、「娘や娘子」であらうと努めていたトマス・フリードムの父の関心をひく奴隸制廃止問題に関する話題を持ち出していくことからも理解できる。

(63) ザカリー・トマス・フリードムは、奴隸制と奴隸貿易の根絶のために活動していたのであり、その実現のために国民党のわくを超えることを意図していなかった。トマス・フリードムが『トマス・フリードム』への寄稿を開始するとの相前後してザカリーもホイッグに接近していくこととなる。

(64) トマス・フリードムが公開の場でおこなった最初の演説で好評をもたらされたのだ。しかし、ザカリーは「王族が臨席をもつている場で腕組みなどしてせざるをなす」トマス・フリードムをだしなめたがためにも、(Life, I, pp. 112-3)

(65) Leslie Stephen, "Macaulay," D.N.B.

(66) "The West Indies," ER, no. 41, pp. 464-88.

(67) 論社 (68) の文献で確定せられた。管見の限りでは右記の説は存在しない。

(68) *Life*, I, pp. 116-7.

(69) *Letters*, VI, pp. 290-1 と同十編アーサーの一覧がある。

(70) Thomas Babington Macaulay, *Critical and Historical Essays*, 3 vols, London, 1843. ただし、Letters, IV, pp. 40-1 と一八四一年六月二十日付書簡を *ibid*, IV, pp. 119 と一八四一年四月十九日付書簡ではトマス・フリードムの再刊を好んでいたといふが示され、一八五〇年に増補がなされた後の版は、二十七編を収録するのを常とする。

(71) Thomas Babington Macaulay, *Miscellaneous Writings*, ed., T.F. Ellis, 2 vols, London, 1860. 本書の著者未記。

(72) *Works*, フィルム版『チャタム』モード版の八巻本では第五巻から第七巻に發表順に収録されてる。

(73) "The London University," ER, no. 43. (February 1826), pp. 315-41, in SW, pp. 3-33.

(74) "Major Moody's Reports, Social and Industrial Capacities of Negroes," ER, no. 45 (March 1827). pp. 383-423.

(75) "The Present Administration," ER, no. 46 (June 1827), pp. 245-67.

(76) James Stephen (1758-1832, DNB) ゼ、奴隸制の廢止に力を貸した人物の一人であつて、チャーチル& William Wilberforce ジャスティンス「ヘラクレアス」の人物である。たゞ、*The Memoirs of James Stephen Written by Himself for the Use of His Children*, ed., M.M. Bevington, London, 1954. モーリー博士著の「西印度諸島の歴史」に著者の死後問題が登場。トマス ibid, p. 173.

(77) James Stephen, *The Slavery of the British West India Colonies delineated*, vol. I, London, 1824. 第11巻は1820年の刊行。

#### 参考文献

(78) "History," ER, no. 57, (May 1828), pp. 331-67. 著者不明。書名は H. Neede, *The Romance of History. England*, London, 1828 とされる。題名は著者が書名が誤りである。

(79) "The West Indies," p. 469.

(80) ibid., p. 473.

(81) ibid., p. 475.

(82) ibid., p. 481.

(83) ibid., p. 483.

(84) ibid., p. 485.

(85) ibid., p. 487.

(86) イギリス議会の奴隸制の廃止のための運動について、E. ウィリアムズの『資本主義と奴隸制』(中山毅訳、理論社、一九八七年)を参照。但、ウィリアムズのマニフェストに対する評価は公正とは言えない。ウィリアムズは、一八二〇年代前半の奴隸制廃止問題の中心的角色の活動を無視し、一八四五年二月二十六日の演説『砂糖税』の片言隻句ともにマニフェストが奴隸制を擁護していると主張してゐる(一一九~一〇〇頁)。しかし、グラッドストンを諷諭しながらは

- 」なども載る『金縛紙』は、英國が奴隸制を擁護するものでは不正確な表現であると述べる。)」の演説は *Speeches of the Right Honorable T.B. Macaulay, M.P. corrected by himself*, London, 1854, pp. 339-62. これが演説集といふべき *Speeches* である。だが、既述の如く、1840年から1841年にかけては、実際には1841年に行われたのである。
- (87) ピーター・ヘンリイ『「スルベイーの論文』や「バトラーの論文」が、革命的支持者たる政治家「スルベイーの弁護」であるが、1841年8月8日付書簡。
- (88) *Letters*, VI, p. 136. 1841年8月8日付書簡。
- (89) SW, p. 14.
- (90) SW, pp. 16-17. ブルトは、具体的な事例をあげて論じてゐる。
- (91) SW, p. 32.
- (92) London University College である。このカレッジの設立とともに創立されたチャーチ・カレッジ・カレッジは、大学である。
- (93) "Minute on Indian Education," SW, pp. 235-51. この演説は、Clive, pp. 342-426, Cruikshank, Chap. 3, G. & N. R. Sirkis, "The Battle of Indian Education," *Victorian Studies*, XIV (June 1971), pp. 407-428, などを参照。
- (94) "Education," *Speeches*, pp. 466-91.
- (95) "Social and Industrial capacities of Negroes," p. 387.
- (96) *ibid.*, p. 392.
- (97) *ibid.*, p. 395.
- (98) *ibid.*, p. 399. ブルトの労働に対する見方も西欧の労働觀を反映したものと認めなく。黒人の労働觀も同一のものとなる。なぜなら、ブルトは、労働の見方から出発してくる以上、労働は、報告書の作成者達に等しい。
- (99) *ibid.*, p. 421.
- (100) ブルトは、トロピカルのたるに黒がまだ黒いが、それがなくなくなる。しかし、當時の政權を直接支持、もしくは非難する立場で、黒人を差別する立場である。
- (101) "The Present Administration," p. 247.
- (102) H.W.V. Temperley, *The Foreign Policy of Canning 1822-1827*, London, 1925, 2nd ed., 1966. ゼーベック艦長が外交の

みな心地、カリハグの政治情勢について語る部分が多く有益。ウーリントンの攻争については、特に十八章を参照。

- (103) “The Present Administration,” p. 249.
- (104) *ibid.*, p. 251.
- (105) *ibid.*, pp. 251-2.
- (106) *ibid.*, p. 255.
- (107) *ibid.*, p. 260.
- (108) *ibid.*, p. 260.
- (109) *ibid.*, p. 261.
- (110) *ibid.*, p. 262.
- (111) *ibid.*, p. 262.
- (112) *ibid.*, p. 262.
- (113) *ibid.*, p. 264.
- (114) カリハグは八月八日に急死する。マコーリーは父にあてた書簡の中でカリハグが「拉入臣をやめた時の時に死んでしまった」など、シックな敗北や「虚無の中の虚無」すべては無」と記す状態であった。Letters, I, p. 224. 但し、カリハグの死により、「懸念の大部介」や「組閣における疑惑」が消え去り、政府はかえりて強化されるに至る。マコーリーは八月十四日の書簡で示してゐる。Letters, I, 226. たゞ、カリハグとホイッグの関係も一八二七年の組閣の時に唐突に開始された訳ではない。ホイッグの領袖の一人であるトマス・モラスの公食してから記述がホランでモラスの息子の一八二〇年の日記に見られるが、接觸そのものが示すところの存在したのである。The Earl of Ilchester (ed.), *The Journal of the Hon. Henry Edward Fox 1818-1830*, London, 1923. pp. 35-6.
- (115) ホイッグの指導者の一人であるランバダウン侯がこの語文を高く評価するところ効果はおもんだ。Letters, I, 224.
- (116) *Life* は「一幅の書かれてこないが、ブルームが『H. H. ハンブリ語譜』だけでは生計を立てられないがためにマコーリーのために奔走してこだいわざ、事業である。
- (117) John Singleton Copley, Lord Lyndhurst (1772-1863, DNB) は、一八一六年に大法官に就任したマコーリーの政治家。党派心に左傾するといふがなく、ブルームとの親交を深めている。マコーリーがブルームの推薦によって雇用されたのではなくが、リンクルースト卿

かの前年のうちに受けていた申し出を、ブルームの影響を知らず延引していた。

(18) マヨーリーは一月十八日に任命されるが一月八日にはムコクシが辞任した後、一月二十五日にウェリントンが組閣するまで内閣は不出であった。

(19) *Letters*, I, p. 230. 一七八八年一月十八日付のザカリーへの書簡。

(20) 非常に有名な論争である。『この『政府論』は小日暮一氏による翻訳が英波文庫（一九八三年）に収められ、その解説でもJ. G. 繩争は認められてゐる。また、J. Lively and J. Rees, eds. *Utilitarian Logic and Politics*, Oxford, 1978. に詳細な解説と共に両者の論争文は収録されている。石上良平氏の『英國社会思想研究』（増訂版、花曜社、一九七四年）の第十一章、園田正司氏の『亞歷治』（みすゞ書房、一九八九年）の第二章はせねやねいの論争について詳しく述べた記述がある。

(21) R. Mortimer, *ibid.*

(22) マヨーリーの賄賂の事情は、一七八九年一月十日付のザカリーへの手紙 (*Letters*, I, pp. 264-6) と *Life*, I, pp. 135-6. と並用されることが多いが、アーヴィング夫人の記述が直接の典拠ではないので注意が必要となる。

(23) 一八三〇年の九月をマヨーリーが、ハランベド通り。 *Letters*, I, pp. 287-308 はハラハス辯在中の *Journal Letter* であるが、これである。

(24) 一八三〇年八月十九日付の書簡ドボーリトニヤー。 *Letters*, I, pp. 281-2.

(25) 一八二〇年九月十六日付モーリト宛書簡。 *Letters*, I, pp. 298-300.

(26) Dionysius Lardner (1793-1859, DNB) の脚注ドボーリトニヤー。 *Letters*, I, 311.

(27) Leopold von Ranke, *Ursprung und Beginn der Revolutionskriege von 1791 und 1792*, ランケが一八七五年に刊行した著書である。著者末尾。

(28) 一八一六年と『一七八九年から一八一五年までの最近の歴史』の題する講義をおこなったのが最初である。一八七一年におこなわれた最後の講義は『一七八九年以来の最近の歴史』の題である。その他の二つ目の講義の序説が講義の題目の一覧表と共に Leopold von Ranke, *Vorlesungseinleitung*, hrsg. von V. Dotterweich und W.P. Fuchs, München, 1975. に収録されてゐる。

(29) Ernst Ziegler, *Jacob Burckhardt's Vorlesung über die Geschichte des Revolutionsalters*, Basel, 1974. ブルクハルトが『革命時代史』の題する講義を最初に執り切ったのは一八五九年の事である。一八六七年におこなわれた講義の聽講者のノートを中心

ルート復元されたものとされる歴史学である。序説・革命前史・ハーバー革命・ナポレオンの國への部分から構成される。

- (130) Thomas Carlyle, *History of the French Revolution*, London, 1837.

(131) John Robert Seeley, *Life and Times of Stein*, 3 vols, London, 1878. ハーラーは「フランス革命そのものではなくナポレオンの敗北によるロイヤルの崩壊がシニターンの崩壊だったのだと言ふべきだ。」ハーリーは「ロイセーはナポレオンとの対決による大船な歴史書はあんまりない」と述べる。ハーラーは「ロイセーはナポレオンの大船な歴史家として反抗心を燃やし、革命的な歴史の確立に努めている。」ハーラーは「デボラ・ワームル、Sir John Robert Seeley & the Use of History, Cambridge, 1980. 「誰」の專著である。

- (132) Lord Acton, *Lectures on the French Revolution*, London, 1910. 筆者未見。

- (133) *Letters*, I, p. 314. 一七八〇年十一月十七日付のペーパーへの書簡。

(134) 一七八一年十月十九日付の書簡は「今なへんが第1船を終めむたる」ルートレーヴを最後にハーラー自身の記憶を現せなくなり。 *Letters*, II, p. 107.

- (135) *Life*, I, p. 159. ルートレーヴが十年前（一八六六年）に八十八頁の原稿を用意したことが記録されてる。

(136) ハーラーの妹トレンカヒコト夫人、ルートレーヴ夫人が亡くなる。O・ルートレーヴを経てG・M・ルートレーヴと再びハーラーが死んだ後、ルートレーヴは「Lord Macaulay: Introduction」, in Lord Macaulay, *The History of England*, Penguin, 1979, pp. 24-5.

- (137) ハーラーの死後は、次誌の文献の序説を参照。

(138) Thomas Babington Macaulay, *Napoleon and the Restoration of the Bourbons*, edited by Joseph Hamburger, London, 1977. ルートレーヴは「ナポレオンとブルボンの復位」、副題の形で「Napoleon and the History of France, from the Restoration of the Bourbons to the Accession of Louis Philippe」が原題である。

- (139) ルートレーヴの死後は、ハーラーの「トキヌス」が出版された。

- (140) *ibid.*, p. 43.

(141) ハーラー派の没落を語る部分の前半は「残存してしまった」が「現存しない」。

- (142) *ibid.*, pp. 43-5.

- (143) *ibid.*, p. 55.

- (144) *ibid.*, p. 55.
- (145) *ibid.*, p. 58.
- (146) *ibid.*, pp. 62-92.
- (147) *ibid.*, pp. 43-62.
- (148) *ibid.*, p. 67.
- (149) *ibid.*, p. 68.
- (150) *ibid.*, p. 70.
- (151) *ibid.*, p. 71.
- (152) *ibid.*, p. 73.
- (153) *ibid.*, pp. 74-5.
- (154) *ibid.*, p. 81.
- (155) 特に外国からいわれた国王と考える傾向が強かつたことが、不人気の最大の理由。マコーリーは考へてゐる。*ibid.*, p. 87.
- (156) *ibid.*, p. 90. なお、ランケは一八三二年の論文『フランスに於ける王政復古について』(堀米庸三訳『十九世紀イタリアノ歴史』千代田書房、一九四八年所収)で革命の成果を温存したまま君臨してしまったことをルイ十八世の大きな矛盾とし述べてゐる。
- (157) *ibid.*, p. 91.
- (158) *ibid.*, p. 92.
- (159) *ibid.*, pp. 92-105.
- (160) *ibid.*, p. 99.
- (161) マコーリーは、急進的な改革を好み、稳健な立場に立つてゐる。ホイッジとやう党派の立場を演説などで語る時、マコーリーは、非常に雄弁になるのであるが、レトリックの上で雄弁であるのであって、実際には中道稳健な立場の自由主義者の立場がマコーリー本来の立場であるところだが、最近の見解である。Hamberger や trimmer やマコーリーが呼ばれているのは、重いすれども、ホイッジ一辺倒という見方を離れてマコーリーを位置づけておられるは、まだ中途の段階でしかなる。Clive, etc.
- (162) *ibid.*, pp. 48-9
- (163) 一八三一年二月一日の選舉法改革演説がマコーリーの最初の議念での名声を確立したのである。前年の処女演説などが特に注目を

浴びた気配はない。

(164) *Speeches*, p. 182. 一八三九年五月二十九日にエディンバラでおこなわれた選挙演説。インドからの帰国後、政界から離れていたマコーリーが下院に復帰するためにおこなった演説である。この言葉から次註の言葉の間がホイッグの功績一覧表と言えるものとなつてゐる。有名なものであるが、選挙演説という性格上、注意して扱う必要がある。

(165) *ibid.*, p. 184.

(166) *Letters*, III. p. 158. 一八三五年十一月三十日付の書簡の中で歴史にとりかかるとの決意を述べている。

〔補記〕 石川先生の学恩にこの拙い一文によつてわざかなりとも報いることができるのであれば、筆者にとって望外の喜びである。在学中に先生の研究室に伺い様々なお話をおきかせいただいた日々は、現在より顧れば懐しく貴重なものであつたと思える。古書肆で手にした書物を先生にお目にかけるべく道を急いだ時も、はるか遠いものとなつてしまつたように思えもする。しかし、忘れ難きものであり、今も鮮明に思いおこすことができるものである。これからも先生の御活躍を願つてやまない。

さて、この拙文を著わすにあたり、論文の形で引用させていただいた文献は、国立国会図書館ならびに駒澤大學図書館において閲覧させていただいたものである。貴重な文献にふれる機会を与えてくださつた両図書館の御好意にはどれほど感謝しても足るぬものと思える。その他の文献に関しては、未見であることを明記してあるものを除き、筆者のささやかな蔵書を利用した。訳文も總て筆者によるものであり、誤訳などの責めも筆者にある。筆者が入手する機会を得ず利用できなかつた文献も一・三にとゞまらず思わぬ誤りも犯しているものと思う。御寛恕いただけるのであれば望外の喜びとしたい。

末尾ながら、このような機会をお与えくださつた諸先生方の御厚意に深く感謝する次第であります。